

富士山麓病院介護医療院新聞 第173号

富士山麓クリニック



パズルを使って作業療法中です

《症例検討・120》

アルツハイマー病という

もうひとつの認知症

院長 清水 允熙

次にあげる症例は、狭義の意味（アルツハイマー博士が発表した認知症という意味）でのアルツハイマー病です。その特徴は発症年齢が比較的若いということにあります。『覚えること』『覚えていくこと』などを中心とする能力が、60歳前後位までしか正常に働かない『体質』を持ち合わせているということが原因のようです。

つまり、もって生まれた『体質』のため、早期に認知症が出現してくるようです。

したがって、現役として社会生活に参加・協力しているにもかかわらず認知症が出現してきます。それは他の老年期認知症の人たちが示すような、社会生活や家庭生活からの引退後、孤独などのため『楽しさ、嬉しさ、美しさ』などを発見する能力や『未来』を創り出す能力の低下が、身体

的衰弱（老化）や物忘れなどと並行して出現してくる認知症とは異質のもので

す。
狭義のアルツハイマー病は認知症の進行が早く、現在の医学の力をもってしても、その進行を止めることや改善することが不可能と言わざるを得ません。

【1】Tさん 男性 63歳

症状

Tさんは59歳のとき「会社に行きたくない」と言い出しました。Tさんはきちんと話しているつもりですが、周りの人たちには理解できないときがあるらしく、非難されたり攻撃されたりするようでした。得意先との約束を忘れていて大

騒ぎになったこともあってからノートに何でもメモするようにになりました。

3年前には、車でゴルフ場へ出かけ、場所がわからないため、朝から夜9時頃までウロウロしていたり、ホテルの風呂場からそのまま全裸で外出したことなどがありました。

また入浴・洗髪・歯磨きなどをするように言われると怒り出すようになりました。指示されることにとっても敏感になり、嫌がりました。

部屋に閉じこもって、ノートに同じことを繰り返し書くようになりました。その後、Tさんはトイレの場所がわからなくなり、家中のあちこち（壁とかカーテンの陰など）で放尿したり、衣類を汚すようになりました。汚れた衣類はベッドの下などに隠しました。

また、話をしていても会話が成立しなくなりました。

ここでTさんは当院へ入所となりました。

経過

Tさんは話好きです。明るい表情で話します。しかし、話の中に名詞が抜け『あれ・これ・それ』の代名詞が多く、意味が不明瞭です。

また「母親（84歳・健康）のことが気になるので家へ帰る」を繰り返し、他の認知症の方に話しかけ、相手が自分の話を理解しないと暴力的になることもありました。この頃にはもう、ノートには何も書くことはしませんでした。その後、一時的に、自力で食事摂取、衣類の脱着、トイレ行為などは可能になりました

たが、能動的意欲は消えていきました。積極的な行動としてはティッシュペーパーを集め蓄えること、他の利用者の名札などを持っていつてしまうことなどでした。認知症状態の経過は不良でした。

さらに4年が過ぎました。まだまだ若い年齢にもかかわらず、Tさんは67歳で肺炎を併発し死亡しました。



【2】 Iさん 女性 37歳

妊娠・出産の影響で

出現する認知症

Iさんの姉から「妹は認知症なのか、精神病なのか、教えてほしい。今後の接し方を教えてほしい。私も（世話をしている）どうしてもイライラして怒ってしまったり、強く命令をしてしまう」と相談を受けました。

Iさんについての外来診察での印象は、狭義のアルツハイマー病とは異なったものでしたが、一応、そのようなものとしてお姉さんには説明させていただきました。その後6カ月して、Iさんは当院へ入所となりました。

症状

自宅でのIさんの症状は次のようでした。

①ぼんやりしている。気分が沈みがちな様子。話し掛けられると答えるが自発的に話をすることはない。
②今あったことを覚えられない。

③自分の年齢、曜日・日などのがわからない。

④何をするのも動作が鈍く、反応も遅い。

生活歴

東京都出身。味噌製造業を営む両親のもとに、3人きょうだいの次女として出生。明るく活発な子供に育ち、学校の成績も優秀。児童会役員、生徒会役員、運

動部キャプテンなどを経て、大学を卒業。中学校教員となる。

29歳で結婚。夫は公務員。

30歳で長男を出産。

31歳のとき、姑との間、夫との間で精神的トラブルが発生。

32歳、夫と姑に反対されたが長女を出産

33歳、静脈瘤の手術を受ける。

35歳、夫は子供2人を連れて実家へ戻る。

現病歴

31歳、道順をなかなか覚えられなくなる。腐った魚を料理してしまった。生ゴミを放置していた。

32歳、書類を紛失したり仕事上のミスが多くなる。家事がうまくできなくなってきた。

34歳、同じ物を買ってきってしまう。生理用品を使えない。家計のやりくりができなくなってきた。A精神科を受診、数回通院した。

35歳、待ち合わせの場所に来られなかった。本人にはまったく悪びれた様子がなかった。警察官に家まで送ってもらったこともある。大学病院を受診。本人が車の運転中、事故に遭う。C病院を受診。MRI（磁気共鳴画像診断）の結果は異常なし。脳波検査で



は異常あり。担当医より抗てんかん薬をもらう。勤務先の学校への道を間違え、休職する。

36歳、姉と生活が始まる。買い物も頼んでもメモを忘れてしまう。めまい・ふらつき・手指が震える、はつきり話ができない。D大学病院を受診。CT検査では問題とするような異常はない、脳波検査では寝たりに起きたりの状態の波形が出ている、と言われた。薬を処方された。ふさぎこむようになる。被害妄想と思われるが、夫に電話したら「俺には愛人がいると言われた」と言っていた。日記も書けなくなる。文字もまったく書けなくなる。帰宅できず、一晩を外で過ごすことがあった。

37歳、薬を中止したら、動作がやや早くなり表情も

戻ってきた。E大学病院を受診。「器質性の脳障害の疑いがある」と言われた。投薬を受ける。夫から離婚の話が出る。かなりショックだったらしい。体重が65キロから55キロまで減少。F心療内科クリニックへ通院を始める。他家に入り、布団を敷いて寝ていた。通報により警察に保護され、当院へ入所となる。認知症は重度。

経過

31歳頃から急速に進行してきたいた認知症の症状は、献身的な姉の介護で、ここに至りて進行を止め、小康状態になっていると思われる。しかし、時折はつきりする「独りぼっちはいや」「家へ帰りたい」「ど

うしてよいかわからない。姉や夫に捨てられたのではないか」「夫が私をいらないと言った」「子供に会いたい」…等のため、『悲しみ』と『イライラ』が交錯し、Iさんは混乱状態に陥ります。その分だけIさんの認知症は進行しようとはします。

メモ

○Iさんの母方の祖母は、子供2人を出産後、精神的疾患にて若くして亡くなったとのこと。父方の祖母は正常です。
○Iさんの母は子供3人を出産後、30代で認知症の症状が出てきたとのこと。す。



○Iさんは子供2人を出産後、認知症状態がはつきりしています。

○叔父は正常です。

○姉は正常です。(結婚していません)

○弟は正常です。

○MRIの結果は正常です。EEG(脳波)は異常波がありますが、てんかんを示す波形はありません。

○Iさんの症状は、狭義のアルツハイマー病と似てはいますが異なっています。出現率は百万分の1程度と推測されます。

以上の性質を総合すると、Iさんは『妊娠・出産後に出現する認知症』であると判断できます。その原因は、次のようにまとめることができます。

①妊娠・出産に伴うホルモン分泌の変化により、脳器



質の異常が引き起こされること。出産後、数年で認知症が出現する体質的なもの。

②体質的なものは、女（祖母）→女（母）→女（娘）へと、直系女性に遺伝する。

女（祖母）→男（父）→女（娘）の場合には、娘はその体質をもっていない。

③原因①と原因②が加わることで、認知症が出現する。

（体質＋妊娠・出産またはその状態の変化→認知症）



4月13日、清水理事長が米寿を迎えられ、当施設職員で祝賀会を企画しました。この機会を通じて職員たちが集まって楽しく歓談できたのは5年ぶりです。

理事長の波乱万丈な人生を映像と共に見て、感動に包まれながらおいしい食事を楽しみました。特に、日頃利用者様に食事を提供してくださっている富士産業の寿司職人が当院へ来て下さり、カウンターで握ってもらったことは初体験でした。カラオケ大会、プレゼント贈呈、職員たちのショー披露など忘れられない思い出になりました。

今後も清水理事長の益々のご活躍をお祈り致します。



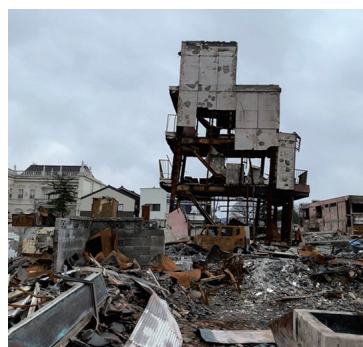
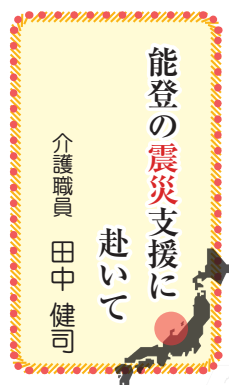
米寿祝賀会（清水理事長：最前列左から5番め）



いしかわ総合スポーツセンター

今年の元日に発生した能登半島地震の災害介護派遣に当施設を代表して3月半ばから3月末までの間、行かせていただきました。

派遣先は金沢市内にある大きなスポーツセンターの1・5次避難所でした。避難所では、輪島市や珠洲市などから自宅が壊れたり、入所してい



休みに訪れた輪島にて

た施設が崩壊してしまつて避難してきた高齢者の自立支援をお手伝いする仕事でした。

身を寄せているおじいちゃんおばあちゃんは、住み慣れた家も無くして途方に暮れているはずなのに、土地柄なのか皆明るく、ユーモアに富んでいて「沈んでいてもしょうがない。なるようにしかならないよ」と笑い飛ばす方々も多かったです。それどころか「世話になるねえ。ありがたねえ」と手を合わせて感謝していたくばかりでした。

今回の災害支援で感じたこ



施設内の様子

とは「笑う」ということがどれだけ苦境に対して人々に勇気を与え、生きていく活力をもたらししてくれるか、という生き抜く知恵を授けていたのだ気がしました。

*

私達が暮らす日本は、世界中の地震の10%がこの国で起きていると言われる地震大国に加え、津波や台風の災害も多い土地です。更には冬は寒く梅雨もあり、夏は蒸し暑いときています。他の国の人から見れば、何故そんなところに住んでいるの?と思われる

かもしれません。

それでも、これまで私達の祖先は数々の自然災害を乗り越えてきました。そして、四季を楽しみ、自然を敬い、慈しみ、自然の恵みに感謝し、自然と共に生きて来しました。

そうした日本人のDNAを今回垣間見る思いでした。

滞在中、金沢の街はインバウンドや北陸支援の観光客で溢れていました。しかし、勤務時間の夜、一步避難所に入るとそこは別世界で、いつ終わるともわからない生活を送る方々との時間が待っていました。

日本に住む以上、どこにいても明日は我が身と思わずにはいられない昨今ですが、気丈に頑張るおじいちゃんおばあちゃんたちを励まさないかならないこちらが勇氣と困難に打ち勝つヒントをもらい、

- テーマ**
- ① 1回でも 笑顔 を多く作る!
 - ② 「今」を大切に!
 - ③ 「今」お礼を精一杯お返し!

スポーツセンター内でのテーマ

帰途につきました。
 今後は今回の経験を活かし、当施設の利用者様にも笑うことで生きる希望が持てるような介護に努めていきたいと思っています。
 更には、将来この地でもし災害が生じた際には、微力ながらも力になれるよう災害介護の勉強をしていきたいと考えております。

フォトギャラリー

桜・こいのぼり・対面面会

新型コロナウイルス感染防止のため、いろいろな行事を縮小していましたが、落ち着きを見せられているため徐々に再開できるようになりました。
 桜の季節には、ドライブしながら御殿場市内を周り、久しぶりに外の空気に触れることができました。また雄大なこいのぼりはみんなで力を合わせて飾りつけをし、爽やかな風を楽しみました。何より心待ちにしていた対面での面会は、利用者様もご家族も満面の笑みです。
 今後も感染対策を行いながら、利用者様が笑顔になれる行事を考えていきたいと思っています。



大きなこいのぼりの下で



施設の桜もみごとです



久々の対面面会でにっこり



ドライブへ行ってきます!

大きな財産

看護職員 石井 友美

私は、入職時から約3年間、3階療養棟で業務を行っております。一般病院とは違い、いざ働いてみると、利用者様に対してのケアが全く違うことに驚きました。

例えば、ケアの丁寧さに私は感銘を受けました。オムツ交換一つとっても、スタッフは思いやりの心を持って丁寧に接しており、一般病院で行ってきたケアは何だったのか？病棟勤務の時に知っていたか？と思いました。スタッフの利用者様に話し掛ける姿勢についてもです。対応の仕方で一瞬で笑顔になり、穏やかに生活することができているのを見ると、「優しさ」がいかに重要であるか実感します。

今振り返ってみると、一般病院においても認知症の方は入院していましたが、私が観察していたのは身体的症状のみでした。認知症の周辺症状が何故あるのか、精神症状についてのアセスメントが少なかったように感じました。また、ターミナルケア・看取りにも関わってきましたが、なかなかじっくりと看護することができず、後悔することがありました。

しかし、現在は一人一人の利用者様としっかり向き合うことができ、とても嬉しく思います。現在の仕事に携わるなかで、私は寄り添うケアが大切だと感じるようになりました。寄り添うケアとは、利用者様の状態・環境を把握したうえで、困っていることや不安に思うことを理解するよう努めることだと思っています。利用者様の言動や過去の生活

歴、体調や価値観など事実に基づいて、何に困っているかがしたいのか、深く理解していくことが必要です。

私は、利用者様と接していく中で、心に抱いている様々な思いや豊富な人生経験について知り、個々の意外な一面や長い人生を生きてきた力強さを実感させられました。富士山麓病院介護医療院で働いてきたことが、私の中でとても大きな「財産」となっています。

日々業務に追われ忙しい毎日ですが、利用者様がその人らしく、安心して生活できるよう環境を調整し、利用者様が自分でできることは見守り、できないことはできるように支援するケアを目指して頑張りたいと思います。



『家に帰りたい』 という思い

CACチーム 大胡田 由美

私は、入職時の研修で松下常務理事や先輩職員方から「CACチームは、精神的ケアの担い手」となる部署であることを学びました。利用者様と接していると、認知症になり今までできたことができなくなるもどかしさや、家族に会えない寂しい気持ち、今後の自分自身への不安等、様々な悩みを抱えながら生活をしている利用者様がたくさんいることがわかりました。一番多い悩みや要望は、『家に帰りたい』です。帰りたい理由を聞くと、「奥さんが心配だから帰る」、「息子にご飯を作ってあげ

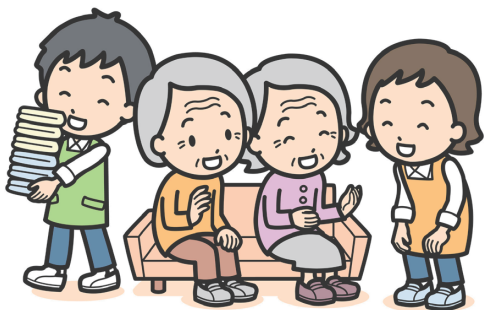
なくちゃいけない」「僕は仕事があるからここには居られない」「お母さんが心配しているから行かないと」「ここは私の家ではない」等、この言葉は実際に利用者様から言われた言葉です。利用者様の思いをくみ取り、どうして帰らなかったのか理由を確認しながら傾聴し、不安が軽減し穏やかに安心できる環境を作ることが私たちの仕事です。傍に寄り添い、自分の話を聞いてくれる人がここにいると分かれると、この人は自分の話を聞いてくれる。信用できると思い、帰りたい理由を少しずつ話してくれます。

私が『家に帰りたい』と言う利用者様に、理由を聞きながら確認する言葉があります。それは、「もし今、家に帰れたら一番何がしたいか」です。それまで声を荒げていた方や、何度も帰りたいと声に出していた方もこの言葉を聞くと、落ち着いて自分のやりたいことを話してくれます。例えば、「料理を家族にふるまいたい」や「奥さんの料理を食べたい」、「いつも行っていたスーパーに買い物に行きたい」、「昔からの友達に会いたい」等、ぼつりぼつりと話し始めます。

その言葉をヒントに、利用者様の得意料理や奥様の好きなところ、よく出かけたところ等、話を膨らませて楽しくなる会話をします。すると、10分前まで家に帰ることが頭から離れなかった利用者様は、安心した顔ですっきりした表情になり落ち着きを取り戻してくれます。

また気分転換も大事なケアの一つです。当施設には、「自慢」「笑い」「希望」という名前の三つの部屋があります。利用者様の様子に合わせて部屋を使い分けて、コーヒーや緑茶を飲んで井戸端会議のようなおしゃべりをしたり、カラオケをして歌自慢をしたり、絵画鑑賞をして非日常を味わう等、様々な活用をしています。何もやることがないと思いが『家に帰りたい』に囚われてしまうので、何か楽しい活動に誘いその活動に集中してもらおうと、安心感や他者との交流を通して自分の居場所を見つけるきっかけ作りにも繋がります。

自分の話を聞いてくれる人がいることが、一番大切なケアであることを利用者様を通していつも考えさせられます。『家に帰りたい』という言葉には、様々な思いが隠されています。その声にもいつも寄り添い、その人の気持ちを大切にし、日々の生活が不安や怒りでいっぱいになるのではなく、自分はここに居ていいんだ」と思い、穏やかに過ごせるようにこれからも利用者様の声を聞きながら、精神的ケアの担い手の一員として努めて参ります。



妻に感謝

介護職員 長藤 肇

私は今年で45歳になります。介護職に就いて長い年月が経過しました。子供の頃は祖父母とずっと同居していて、特に祖母にはかわいがってもらったので、その影響で介護職に就いたのかもしれませんが。

現在は夜勤が多く、たまに日勤という勤務で、利用者様と接しています。一見すると両方の勤務はハードに感じるかもしれませんが、利用者様の日中と夜間両方の行動や様子を知ることができるので、視野が広がります。勉強になり面白いです。そんなわけで昼夜両方の勤務ができることを嬉しく思っています。

といっても、特に夜勤は

ナースさんとたった二人で50名近い利用者様の様子や行動を観察して、安全で安心できる介護を提供しなければなりません。とても責任重大です。

神経を使い、体力はもちろん身体が健康で丈夫でないと勤まりません。私は体力に自信はありませんが今まで大きな病気をしたことがないので、健康で丈夫な方だと自負していました。

私は昨年結婚しました。妻はとても健康志向です。体調を整えるために主食である米は玄米やそれに雑穀を混ぜて食べています。もちろん副食も野菜が多めとヘルシーです。コンビニ弁当やカップラーメンは体調を崩しやすくなるので、前日遅くなるまで仕事で疲れているにもかかわらず、早

起きして弁当を作ってくれます。ちなみに妻はカップラーメンを最後に食べたのは、少なくとも一年以上前だそうです。

妻は私が仕事柄腰痛がひどいのを心配して、知り合いの整体師やカイロプラクティクの先生を紹介してくれました。そこで少しでも悪化させないようなストレッチを教えてもらい、日々実践しています。また私は体がとても硬く、特に股関節が深刻なので、ジム通いを勧められています。妻は独身時代、定期的にジムでストレッチをしたり、エステで薬草蒸しをしたりしていました。内臓を温めるために毎朝必ず白湯を飲み、お腹と背中を冷やさないようにと一年中腹巻を使用し、冬は毎日カイロを貼って過ごしています。

こうして健康には人一倍気を遣っています。

しかし私は妻と知り合うまでは、健康に関してあまり気にしていませんでした。まだ若いから大丈夫、何とかなると思っていました。いろいろと指摘され、40代半ばに差し掛かり、人生の曲がり角に來ているということを感じています。

これからの人生を見据えて自分の体をもっと大切に、長く働けるような心がけていきたいと思っています。妻には感謝感謝です。



楽 史 エッセイ

①

お江戸日本橋七ツ立ち

みなさんは「大名旅行」と聞くと、どう感じますか？

ぜいたくで金を惜しまぬ旅、あるいは議員やお役人が税金を使って出かける「視察」という名の、中味は観光に近い旅行のことでしょうか。

作詞作曲者ともにわからない古い民謡に「お江戸日本橋」があります。

お江戸日本橋七ツ立ち 初上り
行列そろえて あれわいさのさ
コチャ高輪 夜明けて提灯消す
コチャエー コチャエー

江戸時代に、参勤交代の大名行列が日本橋を七ツの刻に出発するという歌です。

当時の時刻の数え方は夜中の〇時を九ツとし、八ツ、七ツと二時間刻みで減っていきます。七ツは午前四時でまだ真っ暗、二時間後の明け六ツが夜明けで

高輪（品川の手前で日本橋から八キロ弱）まで来るとようやく明るくなつて提灯を消します。

さらに五ツ、四ツと進むと、次は昼でふたたび九ツになり、八ツ（二時〜四時）頃に食べるのが「おやつ」です。古典落語の「時そば」（上方で「時うどん」）のおかしさはこの時刻を知らないといわかりませんね。

ほかに「十二支」による方法があつて、午前〇時が「子」、草木も眠る「丑」満時と言え午前二時、ぴったり午の刻が正午、午より前は午前、午より後が午後というわけです。

*

さて午前四時に出発した大名行列はいつまで歩くのでしょうか。一泊目は戸塚宿で約四二キロ、フル馬拉ソンの距離ですが翌日は小田原まで約四〇キロ、これが毎日続くのです。東海道の宿場に「人の悪いは

鍋島薩摩 暮れ六ツ泊まりの七ツ立ち」という言葉があります。佐賀の鍋島様と鹿児島島津様は日が暮れて宿場に着いたのに翌朝は七ツの出発だと嘆いているのです。大名の泊まる本陣や旅籠は寝る間もありません。

強行軍の理由は一日にできるだけ歩いて日程（泊数）を減らし、旅費を節約するためでした。金沢の前田家の場合12泊13日、紀州徳川家（和歌山）は17泊18日、一番遠い鹿児島から江戸までは40〜60日。途中で河川が増水していれば「川留め」で何日も待たされます。徳川家定に興入れた天璋院篤姫の場合は48日かかりました。

人数は小藩で二百人程度、大藩は二千〜三千人、加賀前田家は四千人に及んだといえます。

これは長い行列で沿道に大名の力を誇示するねらいとも……。費用を現在の貨幣価値と比べるのは難しいのですが、薩摩藩では約五億円に及んだとか。

諸大名の窮乏の例は「お国は大和の郡山 お高は十と五万石、茶代がたったの五百文」と東海

道筋で笑われたのは大和郡山藩の柳沢氏。十五万石といえは決して小さい藩ではありません。

数百人の一行が昼食をとって休憩。出発の際に「世話になった」と茶代を置いて行きます。サア、いくら入っているかと楽しみに開けて見たら、たったの五百文（二百文との説も）。

穴あきの銅貨は一枚が一文、四千枚でやっと小判一両に相当する少額の貨幣です。

將軍家の支配を維持するには全国に三百人近くいる大名をどう統制するか、彼らの経済力を弱めることとても幕府に反抗できないと思わせること。参勤交代制度もその一つでした。

「金は内藤志摩守、裾からボロが下り藤」というザレ唄もありました。どんなに嘲笑されても「無い袖は振れぬ」です。

内藤という大名は全国に多数おり、私も「金はないとう」で家紋は下り藤ですが、お殿様の家系とは関係ない、はずです。

（内藤 真治）



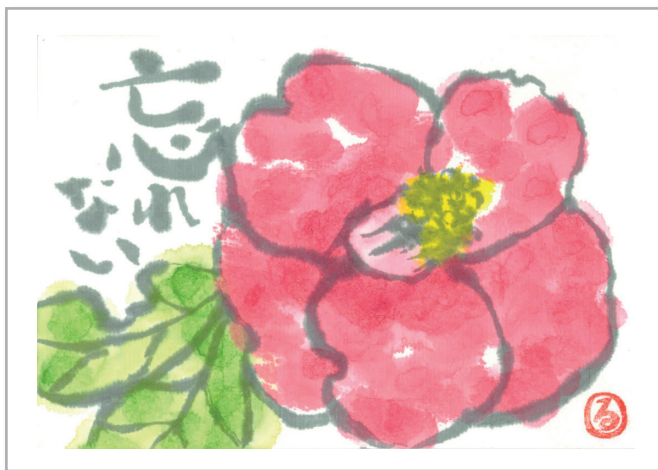


絵手紙

介護職員 熊谷 ルミ子

その日の授業に先生は来られなかった。高校の選択科目の書道の授業。

36歳の若さで亡くなられたのは講師の小池芙美子先生。後に知ったことだが、ご主人はその時、直筆の絵手紙を六万枚書くという仕事に挑戦していた。一年間、一日に二百枚という過酷な仕事を終えるまで収入にならない。



先生は書道の講師を三校掛け持ちしながら、ご主人を励まし支えていた。そして、六万枚を描き終えたその日、喜びの夜、幼い子供を二人残したまま

芙美子先生はくも膜下出血で帰らぬ人となった。しかしその六万枚の絵手紙を機に、ご主人の小池邦夫氏は、後に奥様となった恭子夫人と共に絵手紙の普及、振興に励み、功績を残してきた。お二人の活躍は、ネットですぐといくらでも見つけることができる。この春、私は小池邦夫氏が、昨年八月に亡くなられたことを知った。同時に山梨県忍野村に小池邦夫絵手紙美術館があることも知った。私はそこで、生まれて初めて絵手紙を描いた。芙美子先生のお名前は表舞台には出てこないけれど、私は先生が命をかけてご主人を、そして絵手紙を世に送り出したことを忘れない。

編集後記

清水理事長・院長が米寿を迎えました。めでたいことですが働きすぎというか、昼夜連日で働く現状が心配です。日本の医師は絶対数が不足している上、地域や診療科による偏在が指摘されています。院長の「働き方改革」が早く実現することを祈ります。

能登半島地震から4カ月あまり、この避難所の高齢者介護の支援に当施設の田中さんが半月も奮闘されました。それにしても未だに水道が復旧していない地域があるとは。国（国民）を守るとはどういうことなのか。台湾の震災復旧が早いとの報道を聞いて考えさせられています。今号も利用者様に寄り添った寄稿をありがとうございます。（内藤 真治）